



学校法人 電子開発学園

北海道情報大学

Hokkaido Information University



2024年
6月発行
通巻 第29号

FD・SDニューズレター

Hokkaido
Information
University

巻頭言

混沌とした世界における 羅針盤としての大学

北海道情報大学副学長
渡部 重十

2024年の能登半島地震や羽田空港地上衝突事故は、日本社会に衝撃を与え、未来への不安を募らせています。ウクライナ紛争、イスラエルとガザの戦争、気候変動、経済格差など、世界的な課題が複雑に絡み合い、社会の変動を加速させています。

このような状況下、生成AIの登場は、社会の問題を解決する新たな機会を提供する可能性を示すとともに、倫理的ジレンマももたらしています。情報化社会において、知識やスキルに加えて、適応力、創造性、問題解決能力、コミュニケーション能力などの力が求められています。社会の変動に対応し、社会で活躍するために不可欠な能力を学生が身につける場を提供するために、大学には抜本的な改革が求められています。

従来の一斉授業に加えて、アクティブラーニングを取り入れることが必要です。ゼミや少人数教育により、学生は問題解決やディスカッションを通じて知識を深めることができます。また、プロジェクトベースの学習やインターンシップを通じて、学生は実践的な経験を積み、問題解決能力とコミュニケーション能力を向上させることができます。学生のニーズや学習スタイルに合わせたパーソナライズされた学習が、生成AIを活用して実現可能な段階に入りました。

さらに、地域社会との連携により、学生は現実世界の課題に取り組むことで、社会のニーズを理解し、持続可能な解決策を開発する能力を養うことができます。また、生成AIの活用により、学生は創造性を発揮し、革新的なアイデアを開発することができます。

教職員の成長は、学生の成長にとって不可欠です。教職員は、学び続ける意欲を持ち、最先端の知識とスキルを取り入

目次

- 1. 巻頭言…………… 1
- 2. アドバイザリーボード会議
開催報告…………… 3
- 3. FD・SDフォーラム
開催報告…………… 5
- 4. 2023 CDIO Asian Regional
Meeting 参加報告 …… 7
- 5. FD・SD研修会報告 …… 10
- 6. SD活動報告 …… 11
- 7. FD・SD関連行事および
活動実績…………… 12
- 8. あとがき…………… 12

れ、学生の手本となるように努力しなければなりません。活気に満ちた教職員がいることで、大学がさらに活性化し、学生の成長を促します。学生が複雑で急速に変化する世界で成功するための基盤を大学で築くことができなければ、大学は淘汰の時代に生き残ることができません。

大学は、混沌とした社会において、学生に羅針盤を提供する必要があります。アクティブラーニング、プロジェクトベースの学習、地域社会との連携、教職員の成長を通じて、学生は複雑で急速に変化する世界で成功するための基盤を築くことができます。生成AIの活用は、この改革をさらに加速し、学生が社会の課題を解決し、革新的なアイデアを生み出すための能力を養うのに役立つと考えます。

以下の文章は、私が利用しているAIが生成しました。オープンハイマーが苦悩した時と同じような状況が待ち構えているのかもしれない。

(私) AIと人間が共存する未来社会について、あなたの考えを教えてください。150単語以内にしてください。

(AI) AIと人間の共存は、倫理と人間中心性を最優先することで成功します。AIは人間の能力を拡張し、複雑な問題の解決や新しい発見を支援できますが、倫理的懸念や雇用喪失などの課題にも対処する必要があります。

倫理原則を確立し、人間中心の設計を採用することで、AIの潜在的なリスクを軽減し、その恩恵を享受できます。継続的な適応も重要であり、AIの進歩と社会の変化に応じて、倫理的ガイドラインや規制を調整する必要があります。

AIと人間が調和して共存する未来社会では、人間の能力が拡張され、新しい可能性が切り開かれ、より公正で持続可能な社会がもたらされます。この共存は、人間の創造性、共感、問題解決能力と、AIの効率性、正確性、学習能力を組み合わせることで、人類の進歩を加速させるでしょう。

さらに、AIは人間の認知能力を向上させ、新しい知識や洞察へのアクセスを可能にします。また、AIは教育や医療などの分野でパーソナライズされた支援を提供し、人間の可能性をさらに引き出すことができます。倫理と人間中心性を最優先するこ

とで、AIと人間は調和して共存し、より良い未来を築くことができます。

アドバイザーボード会議 開催報告

経営情報学部 システム情報学科 教授 栗原 純一

1. はじめに

令和5年9月7日にカリキュラムアドバイザーボード会議が開催され、2024年度の新カリキュラムについて各学科等の取り組みについての報告があり、それぞれの報告に対して学外アドバイザーからコメントを頂戴し、質疑応答、本学教職員との意見交換が行われました。本稿ではこの様子について報告いたします。

2. アドバイザーボード会議について

この会議は、学内会場とZoomを用いた遠隔オンラインとのハイブリッド形式で行われ、本学の教職員94名、下記に挙げるアドバイザー8名にご参加いただきました。

氏名	所属・役職
池川 和人	一般社団法人 北海道中小企業家同友会 代表理事
	株式会社ティーピーパック 代表取締役
高井 昌彰	北海道大学 情報基盤センター 教授
大石 憲且	株式会社ネクステック 代表取締役社長
中村 博彦	中村記念病院 理事長・院長
米田 英彦	北海道電機株式会社 代表取締役社長
福田 崇之	金沢工業大学 産学連携局 次長
志知 芳彦	北海道札幌国際情報高等学校 校長
嘉賀 雄一	ドリーム・オンライン株式会社 代表取締役

3. 各学科、部署からの報告

先端経営学科

新カリキュラムでは、学生の主体的な課外活動を単位認定する科目として「ビジネスデザインプロジェクト」を新設したほか、情報系科目を36単位分配置している。前回の会議以降、さらに情報系科目を充実させるため、新たに他学科履修を8単位まで卒業要件に含めることとした。経営学や経営情報学の科目に加えて、求めるコンピテンシーにも掲げている課題解決の主体的な推進や地域活性化への貢献を学べる科目を設置している。

システム情報学科

学びの自由度の向上と卒業要件の単純化を行うとともに、内容の重複した科目や不要科目の削除を行ってカリキュラムを整理した。また、就職に対する意識改革を促すべく、キャリアデザインの授業において自己分析や就職活動対策を実施し、外部から

講師を招聘して講演を行ってもらう。さらにAI実用時代に求められるカリキュラムとして、今後は人工知能に関する科目を増やすことを検討しており、ゼミナールなどにおいてもChatGPTなどのAI技術を積極的に利用することを推進している。

医療情報学科

昨年度の厚生労働省による臨床工学技士学校養成施設カリキュラム等の関係法令等改正により、医療情報学科では1年先行してカリキュラムを策定した。その際、初年次教育の充実としてビギナーズセミナーの見直しを行った。また、卒業までに全員がITパスポートを受験するために、関連知識の見直しと強化を行っている。2024年度からはICTおよびAI関連科目を新規開講する。

情報メディア学科

学生中心のカリキュラムを目指して、3年生から担当教員が教養科目から専門科目の教員に交代する従来の制度を廃し、新カリキュラムでは学科の全教員が全学年の学生を担当する。また、従来の教養科目・専門科目に加えて基礎科目・実践型科目を追加し、学生にとってわかりやすく魅力的な科目構成とした。また、2年生の情報メディア学Ⅰ・Ⅱではオムニバス形式で各教員が「〇〇×AI」と題して様々な切り口でAIを語る授業を行っている。

教養教育

科目の名称変更や新設を行い、各学科で新カリキュラムへの組み込みを判断できるようになった。入学前教育については、本学では参加率は高いものの、全新入生が参加しているわけではないことなどを踏まえ、今後の在り方を検討している。新設した科目において、AIを批判的かつ実践的に応用する方法を学ぶ機会を提供する。新年度から始まる国際情報プログラムは本学の建学の理念にも合致した試みであり、全学科の学生が参加可能としている。

教職課程

令和5年3月に教職課程自己点検・評価を完了し、一般社団法人全国私立大学教職課程協会から、エビデンスに基づいた自己点検・評価が実施されているとのコメントを受けた。昨年の本会議で頂いた助言に対する取り組みとして、学生のコミュニケーション能力に対する自己評価などを含む学修成果（ラーニング・アウトカム）の可視化を行っている。また、学生へのアンケート調査などを行い、教職を目指す学生の確保と育成、およびキャリア支援に活用している。

4. アドバイザーからのコメント、質疑応答

池川様

先端経営学科から質問のあった、企業が新卒学生に求めるITの知識やスキルについては、中小企業でもコロナ禍が後押しとなって様々な対応が必要になっており、ITの能力が高い社員が入社することで組織の改革も必要になってきているとのコメントを頂いた。他学科履修の取り組みの詳細について質問を頂いたが、現時点では先端経営学科と他学科の双方で受け入れをする科目について検討している段階であることが先端経営学科から回答された。

高井様

システム情報学科の学びの自由度の向上は非常に良い取り組みだと思うが、一方で専門教育の質が保証できるかという点に心配があるとの意見を頂いた。生成AIの利活用については、座学の科目として新設は困難でも直ちに既存の演習科目などに取り入れることで、その限界を学生に体得させることが重要とのコメントを頂いた。それに対してシステム情報学科からは、ゼミナール内では実際に生成AIを用いた学習を実施しているとの回答があった。

大石様

システム情報学科の多くの学生が就職するソフトウェアやシステム開発の分野は職種が細分化されており、多人数のチームでの共同開発に必要となる論理的なコミュニケーション力を取得してもらいたいとの意見を頂いた。一方、AIについては現段階では限界もあるため、クリティカルシンキングや費用対効果の考え方が必要であるとのコメントを頂いた。システム情報学科ではキャリアデザインの授業で就職課とも連携して外部から講師を招いていると回答された。

中村様

生成AIについては、今後の進歩を考えると使わないという選択肢はないため、大学での教育は必要と考えられること、また、情報系の資格については、診療情報管理を取り扱っている病院の立場からは医療情報学科の卒業生としての信用にもなるので、持っているほうが良いとの意見を頂いた。これに対して医療情報学科からは、知識や技術を教えるカリキュラムは充実してきたが、病院実習やインターシップなどの現場において求められる実践力についても指導していきたいと回答された。

米田様

情報系の資格については、即戦力として期待される新卒学生の能力を客観的に評価できることや、新卒の高い離職率に伴って教育に時間をかけられない

ことから必要である一方、製造業では資格以外にも統計学の知識やコミュニケーション能力、読解力なども重視されるとのコメントを頂いた。それに対して医療情報学科からは、より実践につながる統計学の知識が身につく体制を次年度以降に構築していきたいと回答された。

福田様

情報メディア学科のメディア情報学の授業においてAIの活用による新しい価値の創造について教える取り組みや、教養科目と専門科目とを分けずにカリキュラムを再構成したことは高く評価できるが、このような情報メディア学科の新たな試みに対して全学的な位置づけを明確にするほうが良いとのコメントを頂いた。それに対して情報メディア学科からは、AIの活用についてはほかの授業の中でも取り入れていくことや教養科目の在り方についてもポジティブにとらえていきたいとの回答があった。

志知様

教養教育に関して、AIについては留意事項などを共有して教員が共通認識を持つこと、入学前教育については大学からの視点だけではなく高校の仕組みを知ること、国際情報プログラムについてはその特色やメリットをアピールすることの重要性について意見を頂いた。教職課程に関しては、アンケート調査結果の経年比較を行って改善につなげることのほか、学生のコミュニケーション能力向上に役立つ他世代との交流の機会や、教員になった後の研修などの自ら学ぶ機会を持つことの重要性、およびウェルビーイングの視点についてコメントを頂いた。これに対して教職課程においてもウェルビーイングの実現に関する教育に取り組むことが回答された。

嘉賀様

コミュニケーション能力の向上に関して、昨今の小中高生の学力の多様性や読解力の低下を鑑み、生成AIの利用によってコミュニケーション能力がさらに低下する恐れについてコメントを頂いた。また、これまで多くの本学卒業生を見てこられた立場から、入学前教育の重要性とともに、個別支援の重要性についても意見をいただいた。これに対して教員からコミュニケーション能力不足の具体例について質問があったが、SNSなどの文字によるコミュニケーションはできても、会話ができない例などが紹介された。

最後に渡部重十副学長からの閉会挨拶をもって令和5年度アドバイザーリーボード会議は終了いたしました。

FD・SDフォーラム開催報告

情報メディア学部 情報メディア学科
教授 隼田 尚彦

1. はじめに

2024年2月29日、2023年度FD・SDフォーラムが開催され、総勢107名が参加しました。今秋に本学で開催するCDIOアジア地域会議に先立ち、再度CDIOを学ぶために、テーマを“Practical Applications of CDIO to Teaching Methodology at HIU (本学における教育方法論へのCDIOの実践的応用)”としました。まず第1部で、西平 順学長より開会の挨拶と「本学を取り巻く諸環境と目指す大学像」についてのお話がありました。第2部では、海外協定校であるタイのラジャマンガラ工科大学 (以下、RMUTT) から、アジア地域でCDIO教育普及にご尽力されているNatha Kuptasthien先生をお招きし、上記テーマに関して講演いただきました。第3部では第2部の内容を踏まえたワークショップを開催し、質疑応答が第4部でした。

2. 第1部：開会の挨拶と「本学が目指す大学像」

西平学長の講演概要は以下の通りです。

【講演概要】

本学を取り巻く国内外の環境を考えると少子化が大きな問題である。道内進学者は、道外に少し流出する状況であるが、道内私大は、ほぼ道内出身者が占めている。進学率の伸び率は北海道が国内トップだが、人口減少は補えない。大学定員の厳格化政策により、一時的なシャワー効果で地方私大の入学希望者が増えたが、少子化の影響が表れてきている。優秀な受験生の青田買い的な総合型選抜が増加し、入試の早期化と長期化が起きている。この状況下で、女子学生確保やオープンキャンパスの重要性が増している。

大学の評価尺度として、これまでの偏差値評価は時代遅れになりつつあり、「入学後の学習効果」が大学の選択基準として注目されつつある。

このような背景下で、大学には生き残りをかけた様々なチャレンジが求められているが、文部科学省からの予算は先細りし、質が保証されればチャレンジが可能な状況にある。そのため、学生主体の教育を真剣に考え、教育の質を担保するような取り組みが必要である。新しい取り組みには失敗もつきものだが、失敗をリカバリーできるうちに取り組むべきで、周辺大学や「スープの冷める距離にある」他大学との連携などを意識しながら、改革を進める必要がある。

マーケット縮小の中で、選ばれる地方小規模大学としての個性 (Value) の明確化と社会への浸透が重要で、受験生がその大学にしか見出せない価値を創り出す必要がある。それには、学風、教育理念、教

育目標などを明確に伝えなければならない。学内コミュニケーションやIR等を有効に行うことで、意思決定をスピーディに行い、ポジティブスパイラルを作り出すことが重要である。

全国で7万人もの中退者がおり、自己肯定感の低い学生が少なくない。DXを活用したきめ細かい指導や高大接続なども重要となるだろう。

基本はシンプルに、教育・研究の実質化、教職員の共感と理解、学生の視点と評価を全体で共有しグローバルな視点やダイバーシティの視点を持つこと、数値データを基に難しい問題を解決し前進する文化を醸成することが重要である。

教育レベルを下げずに教育コストを削減するアイデアとして、他機関との連携やLMS・生成AIの活用・オンラインを活用した海外交流などのデジタル化の推進などが挙げられる。

最後に、組織は人によって発展・成長するので、教職員と学生が「夢と希望」を持てる環境を作ることが必要である。そのためには、考え方を変革する必要がある。身の回りの小さな変化に着目し、振り返り、次を考える。パターンを見抜き、コミュニティを形成し情報を共有することが重要である。

3. 第2部：本学における教育方法論へのCDIOの実践的応用

Natha先生の講演概要は以下の通りです。

【講演概要】

現代の学生は、工学を学ぶ目的が理解できず、モチベーション維持が難しい。CDIOとは、「次世代エンジニアを生み出す革新的な教育の枠組み」として作り出され、学生が主体的に学び始める仕組みを作り出すものであるが、工学以外の分野にも非常に有用な枠組みであり、「次世代卒業生を生み出す革新的な教育の枠組み」と読み替えることができる。

CDIOには、全世界で200超、アジア地域では50超の機関が加盟し、年々増加している。

RMUTTに限らず、工学以外にも多くの適用事例が出てきている。

CDIOを用いて何を教えるのかは、知識とスキルのセットであるCDIOシラバス (第3版) にまとめられており、カリキュラム作成に役立つ。

一方で、どのように教えるのかについては、CDIOスタンダードに纏められている。このスタンダードを用いて、取り組みの改善を継続的に行うことができる。計画段階 (P) では、ビジョンやミッションをベースに、プログラムや科目の成果を考える (スタンダード1~5)。実行段階 (D) として、教育リソースと設備を用いて、学びの活動と教育手法を確立する (スタンダード6~10)。振り返り段階 (C) では、機関レベル、プログラムレベル、各科目レベルで評価する (スタンダード11~12)。そして、それに基づいて改訂・強化を行う (A)。

高等教育においては、考える力がとても重要となる。大量のスライドと課題を課す従来型の授業は、

技術の進展により、意味をなさなくなりつつある。

教育と学びの中身を分類すると、一番下から、①情報を見つけ思い出すこと、②その情報を理解すること、③情報を新しい形に適用することがあり、そのための考える力が必要となる。その上で、さらに高度な考える力として、④それらの情報を分析し、⑤批判的に調べ判断し、⑥何か新しいものに昇華させるといったスキルが重要となる。

この力の育成教育の提案として、授業内容をオンラインコンテンツで提供し、授業時間は、学生間の教え合いや学生同士のグループワークのような、より高いレベルの活動に当てることが挙げられる。また、確認テストを多く実施し、評価は学生自身が行うことで評価の仕方を学ばせることも一つの方法である。

授業時間は、学生達の学びを確実なものにする活動として、実験やプロジェクト活動などの体験型学習に使うこともできる。RMUTTでは、効率的な生産方式のチーム指導、コンピュータプログラミング、アルゴリズム、タイ式伝統的マッサージ、タイ式ハーブの処方などで、体験型学習が実践されている。

【質疑応答】

Q：RMUTTでこれを実践されるにあたって、一コマどのくらいの長さか？

A：1コマ3時間なので、集中を切らさないような工夫が必要。

4. 第3部：CDIOを本学教育に活かすためのワークショップ

講演の中で挙げていた4つの事例を参考に、選択した科目について、どのようにCDIOを適用できるか、カリキュラムにCDIOを適用したPBLをどのように組み込むか、また事務職員は教室や学内の設備、流動性や国際化、アントレプレナーシップなどについて議論しても良いという提示を受け、グループディスカッションを行った。

10種類のトピック（科目）がホワイトボードに貼り付けてあり、各グループに分かれて、与えられたテーマに関してプレスト（10分）し、ホワイトボードにまとめ（15分）、各2分程度で簡潔に発表した。

「プログラミング入門」：初学者を対象とする科目で、基礎を学んだ後に、学生が作成した課題に取り組みせ、教え合わせる。

「語学」：反転授業を導入する。Socrativeのようなツールを活用する。Skitや歌を導入するなど、語学を楽しみながら使用する授業構成にする。

「ビジネスアプリケーション」：CDIOの考えに沿って、ビジネスを4年間で学ぶ仕組みを検討する中で、限られた時間で最大限の成果を上げるためにChatGPTのようなAIの活用も検討した。

「ビギナーズセミナー」：実践を通して、高校までの教育と大学教育の違いを学び、大学生活を生き延びるための術を身につけてもらう。この観点か

ら、ビギナーズポートフォリオの作成やビジネスピッチを行う事例が挙げられた。プレストで難しかったのは、CDからOに繋げていくところで、授業の意図をうまく汲み取れる学生は良いが、そうでない学生にどう対処するかが難しいという意見も出た。

「キャリアデザイン」：レクチャーとディベートを通して時事問題などを考えさせることで、具体的な社会問題に目を向けさせると、就活時のグループディスカッションなどにも役立つのではないだろうか。

「メディアプログラミング演習」：社会の中での応用を考えるような身近なテーマを調べさせる。例えば、トイレの不便を考える。着想した内容をもとにデザインし、実装段階の具体的な問題を解決するためにデザインの試行錯誤（DとIを繰り返す）を行い、最終的には、学内で発表させることを考えた。

「コンピュータシステムⅠⅡ」：学生が最も不得意なのがアルゴリズム。これを理解するには、実際に手を動かすのが良いと考えた。様々なアルゴリズムを使ったトランプの並べ替えを競わせることで、体験的にアルゴリズムを理解してもらう方法を考えて。

「生理学」「病理学」「解剖学」：がんを予防するプロジェクトを考えた。まず、学生にはがんとその検査手法などについての基礎知識を学んでもらう。その上で、グループワークとして、地域と連携してがんに関するアンケートを実施し、IT・AIを活用しながら、データを分析する。その結果を踏まえて、地域への啓蒙活動を行うことまでの一連の流れを体験させることでCDIOを一通り実践できる。

Natha先生からのコメントは以下の通りであった。

ゲーミフィケーションや学生に役割を与えること、カリキュラム全体の流れを考え、自分自身の考えを述べることは大切である。ビギナーズセミナーとキャリアデザインを連携させることもできそう。学生が課題を見つけるのが大変な場合は、教員側から問題を提起しても構わない。CDIOのフレームに縛られ過ぎなくても良い。それぞれの状況に応じて、良いところを柔軟に取り入れていくので構わない。

学生同士の評価では、建設的な意見を出させるために、必ず改善策を示すように指示することが大切。

このワークショップで多くの具体的な計画案が生み出された。このような取り組みを通じて、学生が抱える問題をあぶり出し、授業改善につなげることができる。今回考えたプランをぜひ実行してもらい、来年のFD活動でその成果について検証を行っていただくと良いのではないかと思う。

最後に、西平学長から、様々な発想が生み出されてよかった。このような新しい教育方法に関する教職員間のコミュニケーションの場を繰り返し作りたいたいのコメントをいただいた。また、渡部副学長からは、20年前にMITからCDIOを学び、宇宙開発の大学院教育に取り入れた経験があるが、教員の教授力向上に良い取り組みだとのコメントをいただいた。

2023 CDIO Asian Regional Meeting 参加報告

経営情報学部 先端経営学科 教授 福沢 康弘

1. はじめに

2023 CDIO Asian Regional Meeting（以下「ARM」）が10月9日～11日の3日間、フィリピンのBulacan State University（写真1）で開催され、本学からサイモン・ソーラ教授、隼田尚彦教授、福沢の3名が参加しました。Bulacan State Universityは、マニラから北へ40kmほどのところにあるマロロスという町に立地しています。同大学ホームページによると、学生数は35,958人、教員数1,138人、職員数476人となっています（<https://bulsu.edu.ph/about/>）。



【写真1】会場となったBulacan State UniversityのE-Library。CDIOのサインージが見える。

日程は以下の通りです。

10月9日（月）

午前	●オープニング・セレモニー ●基調講演
午後	●各大学におけるCDIOプロジェクトの進捗状況の確認・共有 ●CDIOアジア地域Co-Leaderの選出 ●2024 CDIO国際会議（チュニジア）の案内

10月10日（火）

午前	●基調講演 ●CDIOワークショップ
午後	●分科会 本学からソーラ教授が発表 “Case Study on Application of CDIO for Non-Engineering Program: Information Technology”

10月11日（水）

午前	●基調講演 ●CDIO加盟希望機関によるプレゼンテーションおよび加盟可否の投票 ●2024 CDIO Asian Regional Meeting 招致希望機関によるプレゼンテーションおよび投票（本学がプレゼンに参加し、投票の結果、2024年の招致が決定した） ●クロージング・セレモニー
----	---

2. 参加の目的

今回の参加の最大の目的は、いうまでもなく2024年のARMを本学へ招致すべく、プレゼンテーションとプロモーションを行うことです。したがって例年よりも多い3名にて出張させていただきました。

その他の参加目的としては、本学が目指す教育改革の手法を諸外国の参加者から学ぶとともに、各国の教育者との情報交換を行うこと、CDIOフレームワークを活用した教育改革について各国の先進事例を学び、参加者たちと意見交換をすること、の2点も挙げられます。

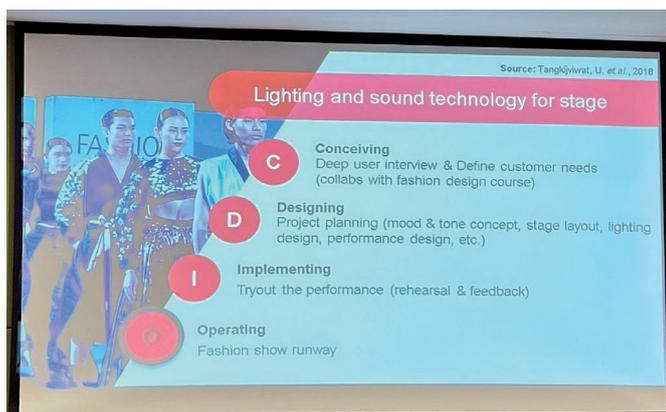
3. 内容

“Growing Partnerships, Growing CDIO”をメインテーマに開催された今回の会議では、教育機関や企業における数多くの実践例が報告されました。また、今回特に印象に残ったのは、ワークショップの時間が多く取られていたことです。会議には永年CDIOに携わっている“ベテラン”から、これからCDIOを学ぼうとしている“入門者”まで、多様なバックグラウンドを持った参加者が集まっています。経験や専門分野の垣根を超えて、自らが行ってきた教育の内容と質はどうだったか、そしてこれからの教育活動をCDIOのフレームワークに照らしてどう進化させていくかについて、ワークショップを通じて活発な意見交換が行われました。

以下、いくつか内容をご紹介します。

RMUTTマスコミュニケーション・テクノロジー学部のUravis先生は“CDIO-Based Curriculum Development for Non-Engineering Programs”と題した講演を行いました。元来、CDIOは「工学教育」のためのフレームワークとして開発されましたが、やがてその内容のすばらしさから、工学教育分野以外へも応用しようという動きが広がりました。Uravis先生は、RMUTTのマスコミュニケーション・テクノロジー学部において、CDIOのフレームワークを取り入れる中心的な役割を果たされた方です。

講演では、まったくの予備知識がない教員たちにいかにCDIOを理解してもらったか、そしていかに全学部でCDIOの理念を浸透させていったかについて自身の経験が語られました。また、実際の授業例として、化粧品会社と連携したパッケージ制作の事例と服飾デザインの事例が紹介されました。学生たちに何度も企業を訪問させ「顧客の声を聞く」ことの大切さを実感させた後、CDIOのフレームワークに沿って商品を実際に作り上げるまでの過程について紹介がありました（写真2）。



【写真2】 Uravis先生による服飾デザイン授業の事例紹介

特に感銘を受けたのは、CDIO Standardsの Interpretationに関する部分です。CDIO Standardsは、CDIOフレームワークに基づく教育を「どのように行うか (How)」を定めた指針といえますが、当然ながら「工学教育」を前提に作られています。Uravis先生はそれを自身の分野に合うようにアレンジしたうえで学部内に広めていきました。つまり、CDIO Implementationにおいては、Standardsをいかに自分たちの教育分野に合うように Interpretation するか、その能力が問われるということが強調されました。このことは、非工学分野である本学においてCDIOを受容していくうえで重要な示唆となっていると感じました。

本学からはソーラ教授がゲスト・スピーカーとし

て招かれ、アクティブラーニングの事例を中心に、学生のEngagementを引き出すための授業例を紹介しました。

日ごろの授業の実践においてCDIOのフレームワークをいかに意識して授業内容を組み立てているか、そして本学はこれまでCDIOにどのように取り組んできたかについて説明がなされ、最終日の2024 ARM招致のためのプレゼンテーションに向けた参加者への大きなアピールとなりました（写真3）。



【写真3】 講演するソーラ教授

先述したように、今回の会議ではワークショップの時間が多く取られていたことが1つの特徴として挙げられます。会議にはこれからCDIOイニシアチブに加盟を希望する大学も参加していました。今後、私たちはどのような教育をしていくべきか、CDIOはどのような役割を果たしていくべきかについて、永年CDIOに携わっている教員と、これから加盟を希望する大学の教員とがブレインストーミングを通じ、意見交換を行いました（写真4）。



【写真4】 ワークショップの様子。付箋を壁一面に貼ってアイデアを共有した。

- CDIOをさらに良いものにするためにはどうしたらいいか
- 新規加入者はCDIOに何を望んでいるか
- CDIOの欠点は何か
- CDIOの良い点は何か

これらのテーマについてアイデアを出し合い、意見交換をすることによって、今後それぞれの大学においてCDIOをさらに良いものにし、組織内で広めていくことを強く意識づけられた貴重な機会となりました。

今回の会議でもう1つ特筆すべきことは、学生の活躍が多数見られたことです。プログラム間の休憩時間やランチタイムに、学生によるアトラクションが多数組み込まれていました。会場入り口でのマーチング・バンドによる歓迎、伝統舞踊、ダンスパフォーマンス、ポップミュージック演奏など、正確に数えてはいませんが50～60人の学生が本会議に携わり、活躍をアピールしました。ARMはあくまで教職員の研修の場ですが、本学で行われる2024 ARMにおいても、学生の活躍の場を多数用意し、アピールできれば良いと感じます。

4. 招致プレゼンテーションと結果

会議3日目の10月11日の午前、2024 ARM招致のためのプレゼンテーションを3名で行いました。20分の持ち時間で、本学の歴史、建学の理念、ICTを活用した独自の教育活動や本学の教育・研究環境、カリキュラム編成の考え方について説明しました。本学における活動内容の面および教育研究設備の面双方において、ARMを招致するに足る十分な能力を備えていることをアピールしました。その後の投票により、2024 ARMの本学への招致が正式に承認されました。

5. 2024 ARMについて

2024 CDIO ARMは、9月5日（木）～7日（土）の3日間、本学にて開催されます。参加者はアジア各国から約200名を見込んでいます。

ARMは第一義的には教職員がCDIOについて学び、教育の改善・改革を推進していくことを目的に開かれますが、同時に、開催校である本学の魅力を世界へ発信するまたとない機会にもなります。本学におけるCDIOの取り組みや教育改革の取り組み、さらには各教員・研究室、各研究センターの研究内容をPRするブースやポスターをを多数準備して、本学の「価値」を参加者にアピールする場を作る予定です。と同時に、本学学生の活躍の場も用意したいと考えています。各研究室における研究活動を学

生がプレゼンテーションする機会や、大会の運営支援や英語での参加者対応、さらにはアトラクションなど、本学学生が生き生きと活躍している様子をアピールしていきたいと考えています。

すでに大会ホームページも制作されていますが、これも本学学生の手によるものです（写真5）。



【写真5】 本学学生の手による大会ホームページ
<https://cdio2024arm.do-johodai.ac.jp/>

本稿執筆時（2024年4月27日）においては、まだまだ開催までにやらなければならない準備作業が山のように残されていますが、9月5日の開催日には、万端の準備を整え、各国からの参加者をお迎えしたいと考えています。

6. おわりに

フィリピンまでの長旅、慣れない土地、そして初めての招致活動ということで、個人的にはとても疲れた出張となりましたが、目標であった2024 ARMの招致を実現でき、肩の荷が下りる思いでした。



招致のプレゼンのために、プロモーションビデオを制作しましたが、多数の教職員のみなさまにご出演いただきました。ご協力いただいたみなさまに、この場を借りてお礼申し上げます。

また、本出張にあたり学長裁量経費を使わせていただきました。ご尽力いただいた西平学長並びに関係各位に感謝申し上げます。

FD・SD研修会報告

情報メディア学部 情報メディア学科
准教授 廣奥 暢

2023年度のFD活動として、まず学習管理システム（以降、LMS）の利用を軸としてAI対応を見込んだ研修会を企画、実施しました。

1. FD研修会01

2023年6月5日 実施

ハイブリッド授業を想定して実験的に整備された115教室を使って、本学LSMのPOLITEに追加されている機能を紹介する研修会を開催しました。事前にアンケートを実施しリクエストの多かったこの主題を最初の研修としました。

2. 生成系AI勉強会

2023年6月9日 実施

アクティブラーニング用に整備されていた107教室を使用して、生成系AIについての勉強会を開催しました。利用可能な3種の生成系AIを実際に使用することで、その特徴を学ぶことを目的としまして実施しました。生成系AIの実力がまだわからない段階でしたので研修とせず、普段の授業にどのような影響があるのかを探る勉強会という形態としました。

講義で課すレポート課題の回答がどの程度作成できるのかなどを知るといった企画でしたが、およそ生成系AIの利用例提示が中心となりました。勉強会の様子は録画しPOLITENEO上で共有しています。

3. FD研修会02

9月20日 実施

LLメディア実習室で

- POLITE4の紹介
- 電子黒板の活用事例について
 - －教職課程科目の授業実践の紹介－
- MS Office系ソフトウェアのリスキリング1
 - －最新PowerPointで授業を記録してビデオにしよう－

の3つのテーマで研修を実施しました。

4. FD・SD研修会

2023年7月27日 実施

「2023年度 入試動向を踏まえて今後を見据える」と題して、入試広報課により全教職員を対象とするSD研修として、115教室でハイブリッド開催しました。



大学の将来展望ということに加え、教員の立場では、入学者の動向、傾向を知り、それに合わせて授業の改善策を検討する重要な手がかりを得ることができる機会となりました。

5. その他の活動

以上の他に、11月9日には後藤江別市長をお招きして本学を主会場として江別4大学合同FD・SDフォーラムを実施いたしました。また、職員のみを対象とするSD研修会が9月「教務事務について」12月「研修報告会」（初任者研修会の報告）も行われました。9月13日にはFD委員会、SD委員会共催で第1回学生相談室研修会、2024年3月11日には学生相談室報告会も実施されました。

2024年2月29日にFD・SDフォーラムとして、CDIOについて、RMUTTよりNatha先生をお招きして講演していただきました。西平学長のDX推進及び反転授業の活用という方針に基づいて、次年度、特に反転授業とCDIOに基づく授業の設計を可能とする環境の整備とそれにかかわる研修について企画して行きたいと考えています。また、2024年4月予定のLMSの更新に付随するFD研修会の企画を検討しています。

2023年度SD活動報告

SD委員会 委員長 瀧澤 浩基

2023年度（令和5年度）のSD活動として、学内で開催したSD研修会と、学外の研修会への参加状況等について、以下に報告します。

1. 学内でのSD研修会の開催（教職員対象）

教職員を対象として以下のSD研修会を開催しました。

(1) eラーニング「情報セキュリティ理解度チェックテスト」

- 実施期間：2023年5月8日（月）～5月31日（水）
- 実施方法：NPO日本ネットワークセキュリティ協会のサイトにあるeラーニングを利用
- 内容：1回25問の4択問題で、90点以上を合格。回答後に不正解の問題の解説を見て理解を深める。

(2) 講演会「2023年度入試動向を踏まえて今後を見据える」

- 日時：2023年7月27日（木）16:15～17:45
- 内容：昨今の入試状況や道内の志願者状況、将来を見据えたポジショニングについて事例を交えて説明していただいた。
- 講師：梅津 直弥氏（株式会社リクルート）、富樫 恵一（入試広報室）

(3) 講演会「本学が目指す大学像について」

- 日時：2024年2月29日（木）13:00～14:00
- 内容：大学を取り巻く環境が変化する中で、教育の質保証の重要性や小規模大学の特徴を出すにはどのようにすれば良いか説明していただいた。
- 講師：西平 順 学長

その他、学生相談室主催（SD委員会共催）として、講演会「ひきこもりがちな学生への対応と支援」、「障がいのある学生への支援の実際と支援における留意点」、また江別未来づくりプラットフォーム主催の特別講演会「いま大学に求めること—もっと知って欲しい、江別のこと—」と題して、後藤好人 江別市長に講演していただきました。

2. 学内でのSD研修会の開催（事務職員対象）

事務職員を対象として「教えることが最大の勉強」のコンセプトで、以下の研修会を行いました。

(1) 研修会「HIUのSDGsを考える」

- 日時：2023年6月22日（木）10:00～12:30
- 内容：SDGsの基本を学んだ後、本学で実施できるSDGsを班に分かれて議論、最後に発表を行いました。
- ファシリテーター：安倍 隆 常務理事

(2) 研修会「知ってもらいたい教務事務」

- 日時：2023年9月14日（木）14:00～15:30
- 内容：教務課の業務説明、単位制度の説明の他、窓口対応のワークショップなどを行った。
- 発表者：八重原 史貴（教務課）

(3) 報告会「研修受講報告会」

- 日時：2023年12月26日（火）10:00～11:30
- 内容：日本私立大学協会北海道支部初任者研修会、大学職員情報化研究講習会、大学通信教育職員研修会参加の報告を行った。
- 発表者：布川 葉月（図書館事務室）、似鳥 克馬（教務課）、岩崎 薫（通信教育部事務部）

(4) 研修・報告会「知ってもらいたい広報業務・名古屋市立大学及び近畿大学訪問報告」、「あなたはいくつ知ってる？情報大の情報システムのひみつ」

- 日時：2024年2月27日（火）10:00～12:15
- 内容：進学相談会や高校訪問などの広報業務、他大学の視察報告、また本学のドメインやアカウントなどについて理解を深めた。
- 発表者：中道 大樹（広報課）、亀井 千寛（情報センター事務室）

(5) 研修会「知ってもらいたい通信教育部」、「CDIOを知ろう」

- 日時：2024年3月18日（月）15:00～17:00
- 内容：本学の通信教育部や通信制大学生の入学動機等をデータに基づいて報告を行った。また、CDIOの基礎知識や協働スキル等の育成についてワークショップを通じて学んだ。
- 発表者：大山 康成（通信教育部事務部）、小田島 敬太（国際交流・留学生支援課兼学生課）

3. 学外の研修会への参加

次の昇格者対象階層別研修会について、4名が参加した（eDCグループ全体で対象職員が参加）。

階層	2級(主任職)	4級(管理職)	5級(上級管理職)
対象者	上部 拓武、高橋 廉	長坂 綾子	矢埜 博隆
実施	11月17日(木) 午後	11月21日(月)終日、22日(火)午後	11月15日(火)終日、16日(水)終日
内容	仕事に対する意識、基本行動、組織力の活性化等	管理職の役割、基本行動、マネジメントの基礎、人事労務等	マネジメントに対する時代変化や基本原則等
講師	(株)ジェック	(株)ビジネスコンサルタント	(株)ビジネスコンサルタント

その他にも、事務職員は日本私立大学協会北海道支部、私立大学通信教育協会主催の研修会や各種オンライン研修に参加しました。

FD・SD活動 行事实績(2023年度)

日 程	行 事
4月3日(月)	新入教員対象研修会
4月10日(月)	新入教員座談会
5月8日(月)～5月31日(水)	情報セキュリティ理解度チェックテスト実施
5月22日(月)～6月9日(金)	前期前半終了科目の授業評価アンケートの実施
6月5日(月)	FD研修会「POLITEの各種プラグイン紹介」
6月9日(金)	生成系AI勉強会
6月22日(木)	SD研修会「HIUのSDGsを考える」
7月17日(月)～8月4日(金)	前期後半終了科目の授業評価アンケートの実施
7月27日(木)	FD・SD研修「2023年度 入試動向を踏まえて今後を見据える」
9月13日(水)	学生相談室報告会・研修会(共催)「ひきこもりがちな学生への対応と支援」
8月21日(月)～8月26日(土)	前期 夏期集中授業 授業評価アンケートの実施
9月14日(木)	SD研修会「知ってもらいたい教務事務」
9月20日(水)	FD研修会
9月7日(木)	アドバイザーリーボード会議
10月9日(月)～11日(水)	2023 CDIO Asian Regional Meeting
10月28日(金)～11月18日(金)	後期前半終了科目の授業評価アンケートの実施
11月9日(木)	4大学合同FD・SDフォーラム
12月23日(金)～1月27日(金)	後期後半終了科目の授業評価アンケートの実施
12月26日(火)	SD報告会
2月6日(月)～2月11日(土)	後期冬期集中授業 授業評価アンケートの実施
2月27日(火)	SD研修・報告会
2月29日(木)	2023年度北海道情報大学FD・SDフォーラム開催
3月11日(月)	学生相談室報告会・研修会(共催)
3月18日(月)	SD研修会

FD委員会の活動実績(2023年度)

委員会	月例ミーティング等日程
FD委員会	4/24(月)、6/8(木)、6/29(水)、11/2(木)、1/9(火)、2/29(木)

あ と が き

最近の本学の動きを見ると「国際」というキーワードが頻繁に出てくるようになりました。国際情報プログラム(IIP)が本年度から始まりました。9月には、工学教育のアジア地域での国際会議であるCDIO ARMが、本学がホスト校として開催されます。本学のディプロマ・ポリシーのひとつである国際感覚を、学生への教育だけでなくFDやSDの活動としても広げていく必要があるのだと思います。

情報メディア学部 情報メディア学科 教授 安田 光孝